

「東名ジャンクション（仮称）」殿山横穴墓群に関する活用検討会

第3回 議事概要

1 日時及び場所

日時：平成29年1月24日（火）14：00～15：40

場所：東京外かく環状国道事務所 喜多見7丁目常設会場

2 出席委員（敬称略）

有識者：中野恒明、阿部伸太、小泉玲子、砂金伸治

区民：中川清史、荒川和茂、八木孝夫

世田谷区：桐山孝義、青山雅夫、工藤郁淳

事業者：佐藤眞平、安原正幸、野坂光弘

3 傍聴者数

8名

4 会議の概要

（1）議事について

資料に基づき「東名ジャンクション（仮称）」殿山横穴墓群に関する活用検討会とりまとめ（案）」について、事務局より説明した。

主な発言は以下のとおり。

11月に開催した第2回目の活用検討会の最後に、「とりまとめ（座長案）」をこの場で提示する旨を説明したが、座長含め各委員にもヒアリングし、これまでの検討会での委員の発言や応募いただいた活用アイデアを踏まえて、「とりまとめ（案）」として配付している。

今回の委員会は、貴重な遺跡が掘り出されて、本来であれば保存したいが、事業の関係で破壊された事実の下にスタートしたものであり、出土した事実を後世にどう伝えていくかということが、最終的にとりまとめるべき内容と考える。

その点については、とりまとめの『活用の具体化にあたって』の部分や今までなかった『外環（周辺）施設などとの連携』に盛り込むこととしたい。

殿山の読みは、「とのやま」と「とねやま」の両方ありで良いか。周知の埋蔵文化財包蔵地として「殿山」という名称で登録されている。その読み方は、機械的に「とのやま」としている。地元の方は長年「とねやま」と呼んでいるとのことなので、今後、掲示するような機会では、地元で「とねやま」と呼称されている旨を併記していきたい。

『とりまとめ』全体を通して、「殿山横穴墓群」に出土した17基の意味とまだ眠っているかもしれない横穴墓を含む文化財の包蔵地の意味の2つがあり、混同して使用されている。

『とりまとめまでの経緯』の10行目は、「一方、地域住民などから発見され

た殿山横穴墓の保存などを求める要望や殿山横穴墓群として、」とした方が良い。

『活用の方向性』の1行目は、「群」を取って「発見された殿山横穴墓」とすれば正確な表現になる。

『活用の方向性』の最後の行は、「元に」を平仮名にして、「もとに」とした方が良い。

『(1) 遺跡の伝承』の7行目は、「発掘場所」が繰り返されているので、「発掘場所が見える近傍」とした方が良い。

『(2) 出土品の展示』の3行目は、「出土品」が繰り返されているので、「出土品を地域で展示するためには、そのレプリカや」とした方が良い。

『(4) 教育資料の提供』の3行目は、「殿山横穴墓群」が繰り返されているので、「殿山横穴墓群に加え、周辺の」とした方が良い。

『(5) 外環(周辺)施設などとの連携』の7行目は、「既存の公共施設とも連携させて」となっており、上部空間等利用で新たにできる施設が含まれていない。換気塔などは3行目の「外環施設」に含まれるとのことなので、「既存の公共施設や将来の上部空間利用などとも連携させて」とした方が良い。

これまで、文言を全員で確認したので、表紙の「案」を取り、この検討会の『とりまとめ』としたいがいかがか。

この『とりまとめ』を区長などへ提出したいと思うが、事前に事務局に区長のスケジュールを確認するよう伝えていたところ、検討会終了後に提出する時間が取れるとのことである。各委員にもご同席をお願いしたいがいかがか。

以上の発言を踏まえ、検討会の検討結果がとりまとめられ、同日、区長などに提出することとされた。

(2) その他

検討会の検討結果がとりまとめられたことを受け、各委員より挨拶した。

主な発言は以下のとおり。

『とりまとめ』には、細かい部分では、文言として書ききれていない部分があるかもしれないが、この段階では、大局的には方向性は整理できている。今後、さらに具体化していく中で、地元の方々のご意見も含めて、さらに明確にしていくことが大事である。

『とりまとめ』の大きな方向性は、この内容で良い。特に、専門の立場から、土の性質、事業の中で墓群が発掘されたように技術と歴史が交差するところであること、事業自体が世界的に注目を浴びていることを述べさせていただいた。今後、どうやって具体化するのか検討されると思うが、全体としてうまくいけばと感じている。

今回は、17基が発見されたが、その周辺にまだいくつか眠っている可能性が無い訳ではない。今後、探査技術が進歩すれば破壊せずに探査できる可能性もあると思う。そうしたロマンをこの地に残しつつ、この周辺を含む国分寺崖線沿いに遺跡がたくさん埋もれ、発見されてきたことを歴史に留め、次の世代に伝える

ことが重要である。

今回の横穴墓群の出土は、従来考えられていた出土状況とは異なる部分があり、崖線上に見つかっている横穴墓の中でも、新しい知見を加えることになった遺跡として評価されると思う。

横穴墓群が存在したことを後世に伝え、今後この周辺から関係する若しくは同様の遺跡が出てきた場合に、今回の成果を踏まえて検討できる形を整えることが、この検討会の意義としても重要なものになる。

3回の検討会を経てまとめられた『活用の方向性』は、遺跡の保存を考えた場合に、今できる最大限の活用の案と言える。

レプリカは一時的に人々の関心を引いて、利用されることもあるかもしれないが、実物に勝るものはない。遺物とは異なり、遺構は空間や場所が非常に重要なので、横穴墓群というスケールが大きいものを一部だけ切り取って再現してもその意味が正しく伝わるか非常に懸念がある。

今後、様々な設計をしていく中で、『とりまとめ』の趣旨を踏まえて、外環施設や周辺の空間作りと併せて、殿山横穴墓群が発見された事実が分かるように取り組みたい。

また、事業のPRをする施設を設置する場合には、展示スペースを設けることやホームページでも情報提供することで、この場所に存在した横穴墓群の歴史について、地域の魅力の発信に繋がるように紹介していきたい。

今後とも、関係者と協議・調整しながら、さらなるご協力をしてまいりたい。

『とりまとめ』を踏まえ、データ等の活用について、相談をして進めたい。

『とりまとめ』にある殿山横穴墓群が存在した事実を後世に伝えることの重大さを改めて認識している。今ある情報や事実関係を正しい考察の下で、ICTなどを利用し、しっかりと伝えていく努力をしていきたい。

『とりまとめ』には、委員の思いだけでなく、区民の方から募集したアイデアも委員で議論して共有できたものが、凝縮された文言として盛り込まれている。引き続き、『とりまとめ』を踏まえ、殿山横穴墓群が将来的に地域のシンボルとなるようにしていきたい。

『とりまとめ』の6つの活用の方向性には、区民の活用アイデアも踏まえた委員の発言が包括され非常にうまくまとまっている。

「とねやま」という呼称や横穴墓があったことを様々な機会を通して、しっかりと後世に伝承し繋げていきたい。

今後の話だが、ジャンクションの名称に「殿山(とねやま)」を使用することで、横穴墓群がここにあったと連想できると良い。

また、地元の方のことを考えると、何か残る施設を整備したいという気持ちがどうしても出てきてしまう。

また、17基の横穴墓群が一斉に出土したスケールの大きさに、本当に感激した。例えば、今後できる施設の壁面を17基の写真などで修景するなどして、あのスケールを将来の子どもたちにも見せて、体感させたい。

成城三つ池でも6基の横穴墓が出土した。あの辺りまで崖線上に横穴墓が連な

って存在していると感じているが、その点も含め、子どもたちに伝承できると良い。

出土した横穴墓は貴重な財産であるので、本来であれば、保存してもらいたかったが、現物がなくなった中で、この殿山に17基の横穴墓が存在したことをいかに後世に残していくかを、第1回、第2回の検討会で発言した。シンプルではあるが、意に沿った形で、かなりの部分の意見が盛り込まれた『とりまとめ』になっている。

横穴墓群の保存もそうだが、横穴墓群によってどれくらい地域が活性化するかという点であるので、今後、外環周辺の街づくりの取り組みをお願いしたい。

地元の方々は、多少ご意見がまだあるかと思うが、『とりまとめ』に今後の可能性を残せて良かったと満足している。